

ご 挨拶

同窓会副会長 山崎 仁嗣(47回)



今回、会長からご指名いただき巻頭の言葉を書かせていただくことになりました。47回生の山崎仁嗣です。同窓生の皆様には、いつも大変お世話になり、有難く厚く御礼申し上げます。

さて、私は昭和23年に団塊の世代に生まれ、全校児童千数百名の小学校から、私を含め3名が1学年3クラスの甲陽学院中学校に入学しました。

中学のクラス担任は中島久先生、通称ダチョウさんで、後年の白髪とは異なり、当時は真っ黒の髪青年教師で、先生の影響を強く受けた我々A組は、クラスのみとまりが抜群で、クラス対抗試合などにはめっぽう強く、クラス応援団を先頭にクラス一丸となって戦いました。ちなみにB組担任は国語の山岡先生、C組は英語の三谷先生で、中学、高校の各3年間、同じクラス、同じ担任の先生でした。

夏休みには生物の東先生の影響で、多くの甲陽生が能勢の妙見山や六甲山、鳥取の大山などに「ウラキンシジミ」や「アサギマダラ」、「ウスイロヒョウモンモドキ」などを追いかけて、おかげで、今でも蝶々の飛び方で「タテハチョウ」とか

「イチモンジチョウ」などとわかります。

体育は柔道の山鼻先生、先生は真っ黒に日焼けして大柄な方だと思っていたのですが、20年ほど前にお会いした時に、意外と小柄な方だったのにはびっくり致しました。

中学、高校の6年間は美術部に所属し、岡西先生の薫陶を受けました。先生は毎年、夏休みに私達を白浜や三方五湖などへ合宿に連れて行ってくださいました。合宿とは言いながら、私たちは絵を描くのはそっこのけで泳いだり、花火やスイカ割りなどに夢中になっておりました。

同窓会にかかわるようになりましたのは20数年前で、当時、同窓会は財政が非常に厳しく、そこから先輩や後輩の皆様とともに同窓会財政の窮状打破に乗り出しました。

新終身会費の導入や同窓会費の増額など、各対策を一つずつ丁寧に会員の皆様方に訴え、皆様方から力強いご支援を頂き、今では新基本金を数千万円用意することができ、回復することができました。これもすべて同窓生の皆様方のご支援の賜物と感謝致しております。

さて、財政が一段落したのを機に、長年懸案の甲陽の後輩のための奨学金制度の導入を打ち出し、これを34回生の方々が中心になって立ち上げられ、現在までに皆様方から約8,000万円を超えるご寄付をいただき、この奨学金を使って卒業した後輩は26名に達し、その寄付金の残高は約6,000万円を超えております。

今回、ファンド委員会では常務理事会より諮問を受け、奨学金制度の見直しを行い、会議を重ねてまいりました。その結果、

・奨学金については、

①1年間の教材費等を含めた学費が現在約80万円であり、公的制度による支援金が約50万円見込まれるので、奨学金の額を年間20万円→30万円に増額する。

②今まで支給人数を1学年1名で、緊急時には別途支給枠を設けてきたが、今後は、年2回、奨学金希望者を募集し、学校の先生方とファンド委員会と一緒に支給の可否を審査し、適当と認められる希望者全員に支給するように変更することに致しました。

次に、甲陽100周年を機に、新たな制度として「自由な学びの支援」制度を考えました。

この制度は甲陽生が学校での教育とは関係なく、「自由に学ぶこと」を支援する制度です。

ご承知のとおり、中高生の12歳～18歳は「夢」多き年頃で、特に甲陽生は学校で学ぶ教育とは別に、「自分が興味のある分野」を持ち、その「興味」にのめりこむ傾向があります。

この興味から始まった研究が、思いがけない成果を生むこともあり、これがその後の人生を変えたり、あるいは決定づけたりする場合もあります。

私たちはそのような「夢」を持つ甲陽の後輩に「自由に学ぶ」チャンスを与え、支援していきたいと考え、この支援制度を思い立ちました。具体的には、現在、ファンド委員会で検討中ですが、

①1つの研究につき、個人の場合は最高5万円、グループの場合は最大10万円程度の研究費用を支援する。

②返済の義務はありませんが、後年、次の世代の支援のための寄付を促す。

などを考えております。

当然ながら、審査を行い、音展や会員総会などで研究発表の機会を持つことなども併せて考えております。

昨年11月の理事会では理事の皆様方にご説明し、ご賛同を得て、4月の役員総会ではより具体的な案を提出し、同窓会役員の皆様にお諮りする予定でおります。

会員の皆様には今後、この「自由な学びの支援制度」をぜひご支援いただくとともに、これからも同窓会活動への相変わらぬご支援、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

予告

今年の会員総会は 8月25日(土)です！

詳細は16ページにて

白鹿クラシックス
HAKUSHIKA CLASSICS

兵庫県西宮市鞍掛町7番7号

■ ショップ

電話: 0798-35-0286

営業時間: 10:00～19:00

定休日: 火曜日



白鹿クラシックス
webページはこちら
<http://classics.hakushika.co.jp>

■ レストラン

電話: 0798-35-0001

営業時間: ランチ 11:00～15:00 (L.O. 14:30)

ディナー 17:00～22:00 (L.O. 21:00)

定休日: 火曜日



公益財団法人

白鹿記念酒造博物館

電話: 0798-33-0008

開館時間: 10:00～17:00

(入館は ～16:30)

休館日: 火曜日

兵庫県西宮市鞍掛町8番21号

会 務 報 告

平成29年11月28日に行われました同窓会理事会における議論を中心に、会務についてご報告いたします。

1 会報「甲陽だより」

第96号を平成29年7月25日付で発行しました。

次号第97号の原稿は12月20日を締切日とし、2月末発行予定とのことでした。

2 夏の会員総会

平成29年8月26日(土)の12時30分から16時30分までノボテル甲子園(現 ホテルヒューイット甲子園)におきまして、恒例の夏の会員総会を挙行了しました。母校創立百周年を記念して、一部、二部とも特別企画が準備されました。第一部は1階「鳴尾の間」にて式典、講演会、パネルトーク。講演会ではホームカミング学年でもある48回生の今田高俊氏に講師をお願いしました。東京工業大学名誉教授で日本学術会議会員の今田氏には社会学者の立場から「リベラルアーツの再興」というテーマで大変興味深く、アカデミックなお話をいただきました。

続いて、「甲陽を語る」というテーマでパネルトークが行われました。パネリストは西村貞一同窓会長(45回生)、大川貴史母校副校長(55回生)、ホームカミング卒業後50年の今田高俊氏(講演会講師・48回生)、池田収一氏(48回生)、卒業後35年の倉井信夫氏(63回生)、進行は文化プロデューサーの河内厚郎氏(52回生)で、それぞれの年代における甲陽の思い出を楽しく語っていただきました。

第二部は会場を2階「甲陽の間」に移して懇親会。特別企画として、阪神タイガースガールズによるチャアリーディングで華を添えてもらい、その後、福引き抽選会で

大いに盛り上がりました。商品を寄贈していただいた各社様には厚く御礼申し上げます。

当日の参加者は266名で、特にホームカミング学年の48回生が多数参加してくださいました。

平成30年の会員総会は8月25日(土)に開催の予定です。

3 甲陽ファンド奨学金

本格的にファンド委員会が発足してから13年目、在校生への支給を始めてから12年目を迎えます。

募金活動は平成17年度から開始し、これまで12年半で約8,072万円の醸金が集まりました。平成29年度前期(4月から9月まで)で約313万円となっており、昨年の同時期に比べると大幅に増加しています。皆様のご協力に深く感謝申し上げます。

在校生への給付実績は、平成18年度から平成28年度まで延べ81名に、年間20万円ずつを支給してきました。また、甲陽だより96号でお知らせしたように、本年度から同窓会奨学金制度が改訂されました。昨年度定期採用された1名は旧制度の継続を希望したため20万円を支給、新制度で選考された5名(前期4名、後期1名)には30万円ずつを支給しました。

現在のファンド残高は平成29年9月末で約6,393万円となっています。

4 その他

11月1日に創立百周年記念誌「木漏れ日のメモリー」が発行されました。事務局を窓口としてご購入いただいた390名余りの皆様に感謝申し上げます。

終身会費納付額設定表(平成30年3月31日まで)

98回~92回	30,000円	78回	37,000円	64回	23,000円
91回	50,000円	77回	36,000円	63回	22,000円
90回	49,000円	76回	35,000円	62回	21,000円
89回	48,000円	75回	34,000円	61回	20,000円
88回	47,000円	74回	33,000円	60回	19,000円
87回	46,000円	73回	32,000円	59回	18,000円
86回	45,000円	72回	31,000円	58回	17,000円
85回	44,000円	71回	30,000円	57回	16,000円
84回	43,000円	70回	29,000円	56回	15,000円
83回	42,000円	69回	28,000円	55回	14,000円
82回	41,000円	68回	27,000円	54回	13,000円
81回	40,000円	67回	26,000円	53回	12,000円
80回	39,000円	66回	25,000円	52回	11,000円
79回	38,000円	65回	24,000円	51回~	10,000円

終身会費納付額設定表(平成30年4月1日~平成31年3月31日まで)

99回~93回	30,000円	79回	37,000円	65回	23,000円
92回	50,000円	78回	36,000円	64回	22,000円
91回	49,000円	77回	35,000円	63回	21,000円
90回	48,000円	76回	34,000円	62回	20,000円
89回	47,000円	75回	33,000円	61回	19,000円
88回	46,000円	74回	32,000円	60回	18,000円
87回	45,000円	73回	31,000円	59回	17,000円
86回	44,000円	72回	30,000円	58回	16,000円
85回	43,000円	71回	29,000円	57回	15,000円
84回	42,000円	70回	28,000円	56回	14,000円
83回	41,000円	69回	27,000円	55回	13,000円
82回	40,000円	68回	26,000円	54回	12,000円
81回	39,000円	67回	25,000円	53回	11,000円
80回	38,000円	66回	24,000円	52回~	10,000円

甲陽学院同窓会奨学金ファンド醸金者一覧

平成 17 年度から募金活動を始め、翌平成 18 年度から奨学金支給を開始した甲陽ファンドは、これまで多くの母校在校生を支えてきましたが、本年度より、さらに手厚い支援を行うため、装いを新たに再スタートいたしました。昨今の社会・経済情勢は、母校の生徒・保護者にも少なからぬ影響を及ぼしており、同窓会の奨学金は、母校と在校生にとって間違いなく有意義なものとなっております。

一方、経済困窮者への奨学金とは別に、母校在校中に学業やスポーツなどの課外活動で目覚ましい成果を収めた後輩に同窓会から賞品を贈ろうということで、昨年春に卒業した 98 回生の中から、公益社団法人日本化学会主催の「化学グランプリ 2016」において金賞を受賞した岡崎 達君に図書カード（3 万円分）を贈呈いたしました。

醸金いただいた方々に深く御礼申し上げるとともに、今後とも引き続き同窓生の皆様にはファンドへの醸金をお願いいたしたく存じます。

醸金金額は一口 1 万円から、方法は以下の通りです。なお、税法上の寄付金控除の対象にはなりませんので、ご了承ください。

平成 29 年 7 月 1 日以降平成 30 年 1 月 31 日までにファンドに醸金くださいました方のご芳名を以下に掲載いたします(敬称略)。まことにありがとうございました。

19回 石井 賢治	45回 小林 智夫	55回 塩谷 圭一	60回 小阪 真二
20回 川島 茂	45回 広町 交紀	55回 浜川 一郎	62回 吉岡 泰彦
24回 織部 成一	45回 田中 眞征	55回 橋本 淳	62回 長宅 芳男
31回 松本 治三	46回 野口 善國	56回 大野 順弘	63回 神崎 修二
33回 森下 哲志	46回 山本 一清	56回 花岡 輝明	63回 野田五十樹
33回 杉原 喬生	46回 入谷 泰生	56回 林 隆一郎	64回 渡辺 明
34回 年森 博幸	46回 近藤 宏	56回 森元 一郎	68回 川口 真之
34回 江隈 一夫	47回 山崎 仁嗣	57回 白尾 誠二	68回 森 健
34回 横内 昭	48回 土井 恭平	57回 辻 尚人	68回 園田 将章
35回 尾山 啓二	51回 横田 真彰	57回 新屋 久幸	69回 大津 雅亮
35回 内田 眞朗	51回 多木 秀雄	57回 岩田 圭一	74回 和田 義之
36回 矢田 忠	51回 近藤 友之	57回 岡 誠	74回 徳岡 俊治
36回 丸井 良太	51回 内田 邦彦	57回 中村 卓司	75回 黒田 洋輔
38回 佐藤 康人	52回 岡崎 裕夫	57回 巽 健	76回 山城 恒雄
38回 江崎健一郎	52回 小野木敏幸	58回 山川 丈人	78回 高木 浩二
39回 多田 昭次	52回 小原 進	59回 柴田 良平	48 甲 会
39回 加輪上敏彦	52回 加藤 尚浩	59回 島本 佳憲	57 回還暦記念 ゴルフ参加者一同
40回 林 範一	53回 遊磨 正秀	60回 阿多 博文	
41回 橋本 久	54回 鳥井 和之	60回 藤岡 由夫	
43回 衣笠 隆之	54回 植田 和孝	60回 土井 浩平	

【醸金方法】

- (1) 同封の振込用紙を利用し、通信欄にファンドへの醸金の旨を明記して、郵便局もしくは三井住友銀行の「甲陽学院同窓会」の口座にお振り込み下さるか、
 - (2) 三菱東京UFJ銀行芦屋支店 普通口座 3998990 口座名義 甲陽学院同窓会奨学金ファンド にお振り込み下さい。
- (2)の場合、振込人の卒業回が分かるようにお願いします。

学校だより



高等学校同窓生講演会

裁判官の仕事 “with cool heads but warm hearts”

大阪高等裁判所判事
高橋 文清氏 (57回)

2017年11月10日(金)の放課後、高等学校視聴覚教室において同窓生講演会が行われました。講師の高橋文清氏は1976年に本校高等学校を卒業後、東京大学に進まれ、1984年に司法試験合格、その後裁判官として大阪、札幌、高崎、徳島、東京などでの勤務を経て、現在は大阪高等裁判所で勤務されています。



講演は、「無表情」、「冷たい」といったイメージを持たれがちである裁判官が、実際にはごく普通の人々と変わらない感覚をもち、柔軟な判断を行っているという経験談から始まりました。その後、裁判官の仕事をスポーツの審判になぞらえてわかりやすく解説され、どうしても裁判は結論に注目が集まるが、実際には集まった証拠を様々な側面から吟味し、結論を導く要素となる事実の認定を行うことが仕事の大部分を占めているのだと示されました。そして、事実認定においては、「誰がみてもそう見える」という普通の社会人の感覚が重要であり、その点で裁判員制度によって様々な背景をもつ市井の人々が裁判に関わることは、可能かつ意義のあることであると語られました。後半では、裁判官が職業上大きな自由を有しており、たとえ新任であってもその独立が保障されていることや、評議を合議体で行う際、物事を多面的に見るために年代の離れた裁判官がチームを組み、そこでは必ずしも年上の裁判官の意見が優先されるわけではないことなどについて具体例を示して解説され、普段我々が見ることのない裁判の実態を垣間見ることができました。さらに、少年事件を担当されたご経験なども基にして、裁判官は人間を相手にしている以上、論理性だけでなく、人には感情や気持ちがあることへの洞察が必要であり、情理を兼ね備えていなければならないという重要な示唆もいただきました。裁判官は杓子定規に判断しているのではなく、当事者となった人やその家族の気持ちを受け止めながら、情熱をもって任務に当たっておられるということが講演を通じて深く印象に刻まれました。

加えて、今回は第2部として、同級生として机を並べた高橋氏と今西昭校長の「対決」が行われました。高校在籍時に高橋氏はアンサンブル部の、今西校長はグリー部の部長を務めていた、というお二人の浅からぬ縁もあり、校長からは下級審と上級審の関係性、冤罪事件における裁判官の責任、死刑制度の是非などについて、鋭い質問がなされました。これに対し高橋氏も可能な限り、時には私見も交えながら丁寧に回答され、両者「引き分け」であったように見受けました。生徒諸君の関心も文理を問わず高く、特に裁判員制度や死刑制度など身近に報道される話題については質問が相次ぎ、講演会の終了が予定時刻を大幅に過ぎるという盛況ぶりでした。

(84回 森田裕樹)

中学校同窓生講演会

多様で持続可能な社会を目指して

酪農学園大学 農食環境学群 環境共生学類 准教授
吉中 厚裕氏 (62回)

2017年11月16日(木)の6時間目、甲陽学院中学校講堂において同窓生講演会が開催されました。本年度の講師である吉中厚裕氏は、1981年に甲陽学院を卒業された62回生です。北海道大学大学院を卒業後、国内では阿寒国立公園や利尻礼文サロベツ国立公園など、国外ではカナダにあるバンフ国立公園や国際連合生物多様性条約事務局、さらにはケニア大使館と多岐にわたって活躍され、現在では酪農学園大学で教鞭をとられています。



氏は、自然環境と人間との関係を考えるにあたって「多様で持続可能な社会の実現」を目指す必要があると述べておられます。では、その「多様」とは何か？これについて、氏は新約聖書などを例に挙げつつ、「一人ひとりがみんな違って、それを認め合うこと。そして、お互いの違いを尊重し、その違いについて知ろうと思うこと」とであると説明されました。続いて「持続可能」については「現世代の我々が享受できている生活が、次世代の人々も享受できるような状態」とであるとおっしゃいました。

「多様で持続可能な社会の実現」という内容が国際社会で真剣に議論され始めた背景として、それまでの人々がちょうど裏返しの開発、すなわち「人類以外の多様性を(ほとんど)認めず、次世代まで生活を維持することが出来ないような強引な開発」を推進してきたことに対する反省があることは、否めない事実でしょう。これについて、氏はSteve Cutts制作の動画「MAN」を紹介しつつ説明されました。この動画は、人類が様々な動物を乱獲し、自然の資源を乱費し、やがて廃棄物にまみれた帝国を作り上げるという内容になっています。人間がもつ限らない欲望、そしてこれまでに「開発」という名のもと行ってきた所為を端的に表した動画であり、中学生諸君にも大きな衝撃を与えたのではないのでしょうか。

氏は、現在の社会で顕在化している問題、すなわち貧富の格差や衛生問題、教育問題などにも目を向ける必要があると述べておられます。そして、こうした問題に取り組むつつ、どのようにして「多様で持続可能な社会の実現」を目指していくか。これが、中学生という「次世代」にあたる生徒諸君の役割であるとおっしゃいました。

日々同じような生活が続けば、世界にはいろいろな多様性があるという当たり前の事実に対して、時には鈍感になることもあるかもしれません。今回の氏の講演は、中学生諸君だけでなく我々大人にとっても、「多様性の尊重」を再認識する良い機会になったのではないかと感じました。

(88回 荒木陸)

学校だより



学校だより



高等学校進路講演会

生命科学研究のための方法の開発とその産業化

弘前大学大学院医学研究科 ゲノム生化学講座 教授
藤井 穂高氏 (69 回)

2017 年 6 月 5 日 (月) の放課後、高等学校視聴覚教室において進路講演会が行われました。講師は弘前大学大学院医学研究科ゲノム生化学講座教授の本校 69 回生藤井穂高氏でした。以下にご講演の内容を掲載いたします。



私は、生命科学の研究を行うに当たって、「生命科学の解析方法の開発」を目指してきました。それは、狙いを定めて努力すれば目標を達成できる可能性が高く、また、それを通じて、「新しい生命現象の発見」や「難治疾患の治療方法の開発」が可能になりうるからです。これまでに、DNA と蛋白質や RNA 等の複合体であるクロマチン構造を保持したまま特定のゲノム領域を単離して、構成分子を同定する方法 (iChIP 法と enChIP 法) 等を開発しています。iChIP 法はノックイン技術 (特定の DNA 配列をゲノム中の狙った位置に入れること) を使って単離したいゲノム領域をタグ付けする方法で、enChIP 法は最新のゲノム編集関連技術を利用した、より汎用性の高い方法です。

科学技術研究を取り巻く日本の現状は、決して良いものではありません。例えば、日本では、アメリカ等に比べて独立した研究者 (PI) になるのに非常に時間がかかります。また、大学の定年延長や、定年後も特任教授等として大学に残る人が多くなってきたため、若い人のポス

トが少なくなり、また研究費の配分も年長の指導的な立場にある研究者に偏る傾向があります。そして、昨今の「客観的」評価の重視のために、「Nature」など名の通った雑誌に多くの論文を載せた人が過度に高く評価される傾向があり、その結果、最新の手法をいち早く取り入れて人海戦術によって論文を量産することが蔓延し、国からの研究費助成もそうした研究への配分が合理的とは言えない水準にまでなっています。そのため、評価するために見識が要求され、短期的な評価になじまないような萌芽的・独創的な研究に対する助成は十分とは言えません。

そのような問題点を解決するための方法の一つは、特許等の知財を取得してライセンス収入を得る、また、ベンチャー企業を立ち上げ、それらの収益を自らの基礎研究に回すことです。知財を利用することにより、事業を独占できます。私は、自分の開発した知財を利用して、癌等の難病を治療するための創薬を行う事業体として合同会社 Epigeneron を設立しました。例えば、発癌プロセスで、プロモーター領域のクロマチン状態の異常によって癌抑制遺伝子の発現が抑制されている場合には、iChIP 法や enChIP 法でプロモーター領域を生化学的に単離します。そして、そこに結合して、異常を引き起こしている分子を同定し、その分子を不活性化化する物質を探して癌抑制遺伝子を再活性化させれば、癌を治療できる可能性があります。会社を運営するに当たって研究以外の様々な業務 (法務、税務等) がありますが、甲陽や東大のテニス部の同期生等にも支援してもらっています。ベンチャー企業がうまく成長できれば、大きな経済的利益を得ることができ、それを利用して新しい技術開発や基礎研究を展開することができます。最終的に、必ずしも正しい判断をするとは限らない科学行政から独立して、科学の発展に寄与することを目指しています。

(58 回 喜多巧)

お世話になりました

昨春、2005 年 3 月に着任された辻信之事務長が甲陽学院をご退職されました。長い間ありがとうございました。昨年いただきましたごあいさつを以下に掲載いたします。

退職に当って

辻 信之



本年 3 月末日をもちまして、定年後の期間満了により退職いたしました。

在職中は石川先生、山下先生をはじめ教職員の皆様方に支えられながら無事業務を全うできましたことを本当に有り難く感謝いたしております。

また、公私にかかわらずお付き合いいただきました同窓生の方々に御礼申し上げます。

私の在職させていただいた 12 年間、甲陽学院中学は伝統を守りながらも新しい時代へ対応するため常に変化を目指した期間であったかと思います。

特筆すべきは 40 人学級 5 クラス制への移行、そして高等学校からの入学廃止、関係諸先生方のご苦労は大変なものでしたが、事務方としても手探りの仕事も多く、県への申請をはじめ教室増のための校舎の増築、新しい先生方の採用、生徒増による新食堂棟の建設や新しい机椅子の配備等々、振り返ってみますと本当に懐かしく当時のことを思い出することができます。

そして、何より最大の印象深い仕事といえば新講堂棟の建設でした。

甲陽学院 100 周年記念として 2 年前から着手した事業でしたが幸いにも在職中の本年 3 月に竣工式を迎えることができました。

100 周年の記念事業としての新講堂建設、甲陽学院の長い歴史のほんの一通過点ではありますが、その記念すべき時に巡り合え、少しでも携わることができましたことは大変光栄であり、関らせていただいたすべての人々との繋がりが私にとって大きな財産になりました。

最後に、次の輝かしい甲陽 200 年に向かって在校生甲陽健児たちがそれぞれの希望のつばさで大空へ羽ばたかれんことを祈念いたしましてご挨拶の言葉とさせていただきます。



学校だより



邪なき思い

甲陽学院中学校高等学校教頭
石井 慎也



昨年4月、山下先生が8年間にわたる校長の職をご勇退されました。代わって新しく校長には今西教頭が就任され、その後任として私が教頭の重責を担うこととなりました。同窓会の皆様には、同窓生講演会、甲陽ファンドをはじめ、日頃から温かいご支援を賜り感謝

申し上げます。特に、昨年度は創立百周年を記念して、高等学校におけるクラブハウスの建設費にご援助をいただき、厚くお礼申し上げます。行政手続きの遅れ等があり、本格的な着工は春休みの予定ですが、何とか5月の体育祭には活用できるよう、現在計画をすすめております。また、百周年の記念事業も、11月の記念誌発行をもちまして一通り終えることができましたのであわせてご報告申し上げます。

今回、甲陽だよりへの寄稿のお話をいただき、ちょうど27年前、甲陽学院に新任教諭として就任の挨拶文を寄せたことを思い出しました。そこでアーカイブを利用していただき、当時の記事を振り返ったところ、なんとそのときのタイトルが『思無邪』だったのです。正直なところ、内容どころかタイトルもすっかり忘れていたのですが、当時よくもこのような大それたタイトルで文章が書けたもんだと恥ずかしくなりました。“思無邪”すなわち“無邪気”は、“明朗・潑瀾”とあわせて今や甲陽生の気質、甲陽の学風を表す象徴的な言葉として、私自身も含め、現在学校の内外を問わず頻繁に使っているものです。そもそも、“明朗・潑瀾・無邪気”というのは、第7代小河校長が、おそらく1984年からの四年間、中学校の入学式の式辞で使われたことで知られることになったのですが、その引用は初代校長伊賀駒吉郎先生の自伝『回顧七十有五年』に遡ります。小河先生は式辞の中で「伊賀先生は、型にはまった人間を創るのではなく、人それぞれが持って生まれたものを十分に伸ばし、お互いにそれを認め合うような広い心を持ってそれぞれの道に進むことの出来る若人を創りたいと願い、校風としては“明朗・潑瀾・無邪気”とした」と述べられています(甲陽学院資料室作成資料より)。その後、第8代の中村校長が在職中に好んで使われたことから、現在のように定着したと考えられます。私が甲陽学院の教諭に就任したのは1991年ですから、当然、この式辞を直接お聞きすることは無かったわけです。では何故、当時就任したての私がこのタイトルを選んだのか?、残念ながら今では正確に思い出すことはできません。おそらく、小河先生によってよみがえらされたこの言葉が周りの先生や生徒達に静かに伝わり続けていて、それを何らかの機会に知ることとなった私の当時の心境と共鳴したからだろうということは推測するに容易いことでしょう。今回、あらためて就任当時の文章に触れ、この言葉との不思議な

めぐり合わせを感じるとともに、当時の自分が抱いていた思い、つまりは初心を思い出すことができました。甲陽学院での折り返しはすでに過ぎてはおりますが、邪なき初心に立ち返り、気持ちを新たに再始動したいと思っております。

さて、周知のように、日本が近代国家として歩み始めた明治以降、いくつもの波、すなわち社会の大きな変化(戦前・戦後、バブルの崩壊、ゆとり教育の登場など)にもまれながら今日の教育は成り立ってきました。そして、いよいよ今まで以上に大きな波が押し寄せてくるといわれています。いわゆる、学力の三要素(①十分な知識・技能、②それらを基盤として答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力、③これらの基になる主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度)を備えた人材を育成することを目標とする三位一体の教育改革(大学教育、大学入試、高校教育の改革)です。私自身は、この改革の中身が具体的な手法も含めて明らかになるにつれて、その内容を知れば知るほど、今まで甲陽学院で進められてきた教育、目指してきたものと重なる点がいかに多いかということに驚かされています。もちろん、取り入れるべきことを謙虚に取り入れることにやぶさかではありません。しかし同時に、大きく見える波だからこそ、いたずらにそれに乗るのではなく波が静まった後の海原を見据えてから、進むべき進路に舵を切るという辛抱強い姿勢、すなわち変えない勇気の必要性も感じています。これもまた、甲陽学院が教育方針とする教養あってこそその姿勢なのかもしれません。大切なことは制度や手法ではなく、常に生徒達とのコミュニケーション、相乗効果を生む言葉のやり取りがどれだけしっかりと続けられているかという点であり、このことは今までもそしてこれからも変わるはずのない本質的なことではないでしょうか。改革改革と騒がしく、言葉というものに対する関心や意味が変化し、何より様々な状況に対処できるようにとあらゆることを先回りして盛り込む風潮がみられるこの世の中では、本当に大切なことがぼやけてしまいそうです。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに」。作家の井上ひさしさんのモットーだったとききます。とてもシンプルですが、大切なことを忘れないようにさせてくれる、私もお気に入りの邪なき言葉です。

新たな百年への第一歩を踏み出す節目の時に、微力な私が教頭の職を命ぜられ不安一杯の一年が過ぎようとしています。周りの方々の協力と寛容さに甘え、日々なんとか乗り越えられております。これからも皆さんにとって「自慢の学校」であり続けられるよう尽力いたしたく存じます。今後とも倍旧のご助言・ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。



山 本 弘 先 生 逝 去



1959 年から 1990 年まで甲陽学院で保健体育を担当された山本弘先生が 2017 年 10 月 22 日に逝去されました。謹んでご報告申し上げます。

思 い 出

長井 浩一 (69 回)

昨年、69 回生の同窓会の連絡をしたときに奥様から「体調を崩しておりますので、出席は厳しいと思います。」とかがっておりましたが、亡くなられたと聞いて非常に驚きました。私の中では、いつもお元気な山本先生をイメージしていたからです。

私は、甲陽学院中学校に昭和 57 年に入学しました。山本先生は隣の 1 年 B 組の担任であり、陸上競技部の顧問でした。私たち中学生からすると雲の上の存在でした。しかし、私たちはそんな年上の先生に対し「しぶちん」「パンツマン」などのニックネームがありました。由来はわかりません。先生をニックネームで呼ぶことをできませんでした。友達同士ではこっそりニックネームで呼んでいました。それくらい身近な存在であったともいえます。

私の山本先生に対する思いでは、中学校での体育（鉄棒）授業です。私は、小学校 4 年生まで逆上がりができず、鉄棒は苦手でした。山本先生の鉄棒のテストは、鉄棒の上がり方を難易度別に A・B・C とし、基本点（A：80 点、B：70 点、C：60 点）が違います。そして、鉄棒上での種目（技術）が難易度別に A・B・C となっています。たとえば、A 種目は、前方支持回転・後方両膝かけ回りなど、B 種目は、後方支持回転・前方ももかけ回りなどです。その種目の難易度と種目数で種目点の合計が決まります。（総合得点）＝（基本点）＋（種目点の合計）となります。とてもわかりやすく客観的なテストでした。私は苦手だった鉄棒を必死に練習しました。そして、できなかった種目ができるようになると、とてもうれしかったことを今でも覚えています。能動的に練習するようになりました。今から思うと生徒をアクティブ（能動的）にさせる工夫がされていたのだと感心します。

当時、頭髪は丸坊主にしなければならぬ校則がありました。髪の毛が長くなってくるとみあげを引っ張られたりし、よく注意されました。生徒指導担当ということもあり厳しい一面がありましたが、その厳しさの中にも山本先生の温かさを感じました。

山本先生、ご冥福をすべての教え子とともに心からお祈り申し上げます。

山本先生ありがとうございました 合田五郎 (69 回)

2017 年末は卒業 30 周年の同窓会が予定されておりました。そんななかで、先生の訃報を聞きました。山本先生の思い出は本当にたくさんあって、それらがドッと蘇ってきます。

2014 年 7 月に数人で明石の先生のお宅に伺いました。ご病気をされたと伺っていたこともあって、中学時代に先生と釣りに行った面々などでお邪魔しました。先生は、ご病気後のリハビリを頑張られていることや、私達の中学時代の裏話などを、奥様も会話の輪に入られて本当に楽しく話されていました。私は神戸の舞子という明石の隣に住んでいたのも、先生のお宅にはしょっちゅう自転車でお邪魔し、明石漁港や淡路島へ釣りに連れて行って頂きました。当時お宅に泊めて頂いたことも度々あり、「あの時もここで同じ様に色々な話をしたなあ」と思いながら会話が弾みました。「実は、『頼むから定期試験の直前だけは君らを釣りに誘わないように』と中村先生からキツク言われてたんや」とか、「淡路島の渡船に乗る時、君は『田中は小学生って言っても分からんから、小学生料金で行け』って言うてたやろ。ホンマに君は悪いヤツやっちゃで」とか、「昔は自分の船持ってたんや」とか。

中学校に入学したてで、丸坊主のくるくる頭にブカブカの学生帽と詰め襟を着た、まるで子供の我々のクラス担任と体育を山本先生は受け持っておられました。体育の授業で覚えているのは、先生が鉛筆をズボンの後ろポケットに入れたままマットで前転し、背中に刺さっていた事件。先生は「危なかったなあ」と。「危なかったって、先生刺さってるやん」。

私は成績が優れなかったのも、子供ながらに毎日が結構プレッシャーでした。そんな中、旧校舎の真ん中の建屋にあった先生の部屋へ行くと、勉強の話は全く無く「おい！週末にええ型のチヌ釣れたで。今度、また淡路のチヌ行こか」という感じで、しばらくの間ホッと出来たことを忘れることが出来ません。釣りに行く時にも、ご自身の軍隊経験談などもお話し頂いたり。時々、取って付けた様に「たまには勉強もしなあかんぞ」とおっしゃるのですが、それはきっと中村先生から言われてたんでしょうね、27 年経って分かりました。

今思えば、中学の 3 年間は短い時間ですが、13 才から 15 才の少年からすれば人生の 5 分の 1 という長い時間で、その長い時間の中でいろいろと悩んでいた自分は、知らないうちに先生から励まされていたのだと思います。

安らかに休んでくださいと申し上げても、きっと先生は今もあちらこちらへ行かれて、竿を振られていると思います。どうぞ思う存分に楽しんでください。

宅間均先生 逝去



1977年から1990年まで甲陽学院で生物を担当された宅間均先生が昨年8月29日に逝去されました。享年91歳でした。謹んでご報告申し上げます。

人生の師

岸本博和(66回)

現在、当方が「ちゃんと」社会生活を営んで生きているのは、宅間先生のおかげである。今、改めてそう思う。

当方が初めて先生とお話しをしたのは、中学入学後、生物部入部の時であるが、「岸本は問題児であるから合格させないように」という趣旨の複数(!)の投書により入試のところに職員会議にかかっていたそうであるから、先生はすでにご存じであった筈である。

まあそんなのを入学させたもんだから、宅間先生を始め、村上千秋・井上良二・森本保各先生方は大変な思いをされたかもしれない。成績は悪い、カンニングはする、ゲームセンターで何度も補導される、警察沙汰まで起こす。恐らく、何であんなのを入れたんや、という雰囲気であったろう。中2のときの担任でもあった宅間先生には、特に楯になってくださっていた。お陰で生物部と中庭は当方にとって安息の場であり続けた。

さすがに生物部の部長になった中3のころには心を入れ替えて、以後は、たぶん、問題を起こすこともなく、高校3年間も生物部でお世話になることとなったが、6年間の生物部でしてきたことは、ほぼ、蟲捕りと標本作りであった。近年のバイオテクノロジーを導入した実験系の「役立つ」・「即戦力」のサイエンス部的なものからは程遠く、博物学の延長線上、というものであった。それは恐らく、先生ご自身が部員に対して、これをしろ、あれをしろ、ということをおっしゃらなかったことにも起因する。当時、すでに絶滅危惧種であった昆虫少年たちの集いの場としての宅間先生の生物部は、この点においても大変に貴重な存在であった。

甲陽での6年間、野山においても先生から薫陶を受けたこともあり、大学院時分からは自然観察会で生き物について人に伝えてきた。四半世紀の活動において、今はっきりといえることは、先生のスタイルであるマイノリティへの眼差しと博物学的なアプローチの重要性である。多種多様なマイノリティが羽を伸ばせる環境に博物学的な視点を加味することで、個々人の持つ多種多様な嗜好(=蒐集癖)を刺激し維持し伸ばし、結果、各人に生き方に対する「こだわり」を形成せしむるに至る、と。およそ社会に(甲陽においてすら)不適合な当方を気長に見守り続け、蟲捕り三昧を許して下さった先生の接

し方こそが、現在、当方が子供らに接するときの最重要の基準となり、今も心のなかで指導してくださっている。宅間先生、本当にありがとうございます。

宅間先生を偲んで

砂川章雄(72回)

昨年2017年、宅間先生が91歳でお亡くなりになりました。私は中学1年の時から生物部の顧問としてお世話になったほか、中学3年では宅間先生担任のC組でお世話になりました。いつも穏やかだった宅間先生。でも怒るときは眉を吊り上げた恐い顔で、しかし怒鳴ることはなく諭すように叱られた覚えがあります。いつも白衣姿で教鞭をとられていた姿が今でもついこの間のように思い出されます。

思い出深かったのは、生物部での出来事。毎年一番楽しみだったのは、夏の串本旅行です。皆で水中生物を捕まえ、特に夜釣りは格別に楽しかった。中学3年の時、私は部活動として「エンジンの組織培養」の実験をしていました。串本旅行の前日も、滅菌箱の中でエンジンの組織片を採取するため、入念に滅菌箱の内部をアルコール綿で拭いた上で、つい勢い余ってスプレーで大量にアルコール噴霧したあとに、ピンセットを消毒すべくアルコールランプに火をつけてしまったのです。すると、、、滅菌箱が「ボンッ!」という音を立てて大爆発!慌ててゴム手袋から手を抜いたのですが、両腕とも大やけど状態。呆然として立ち尽くしていると、宅間先生が飛んできてくれて、水で手を冷やすよう指示した後、すぐに病院を手配してくれたのを覚えています。そして、翌日からの串本旅行。両腕を包帯でグルグル巻きにした私に、最初は「やめておくのがいいんじゃないか?」とおっしゃいましたが、どうしても行きたいと話すと、「分かった、じゃあ十分気をつけながら行くことにしよう」と言ってくださいました。いま思えば、自分が教師の立場だったら大事を取って絶対に行かせないと思うのですが、宅間先生は生徒の自主性を最大限尊重しつつ、そっと後ろで見守ってくれている、そういう方だったなあと懐かしく思い出されます。

卒業式の後だったか、生物部のメンバーを中心に宅間先生のご自宅にお邪魔したことがあります。広いリビングに通していただくと、そこにはレコード・アンプなど立派な音響機器があり、自宅用カラオケセットまでありました。普段の白衣姿からはちょっと想像つかない先生の一面を見せていただいた気がしました。まだ社会がこういうものかもわからないながらも、こうやって家庭では仕事以外の趣味も優雅に楽しめるようになりたいな~と思ったものです。自宅に集まった生徒たちを目尻を下げながら嬉しそうに見つめていた宅間先生の穏やかなお顔が今でも浮かんできます。

宅間先生、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

リレーエッセー

高等教育の状況と高まる同窓会の重要性

辛島 理人 (75回)



駅で甲陽生を見かけ、中学校の制服にポロシャツがあると知ってビックリした。私が卒業してから四半世紀の間に、他にも大小の変遷があるだろう。皆さんも、中学・高校や出身大学に足を運べば、母校の変化を感じるはずである。ここで、国立大学を事例に、教育現場が変わる様子をご紹介したい。

国立大学は2004年に(教職員が国家公務員でない)「国立大学法人」となり、(法人化された国立博物館・美術館と同じく)政府からの運営交付金を主たる収入源として運営されている。そして、運営交付金はこの10年で10%ほど削減された。

高等教育をとりまく環境を整理すれば、世間と同じく、グローバル化と流動化となるだろう。1983年に出された計画が実を結び、外国人留学生数は2003年に10万人を越えた。現在は大学などに18.8万人(ほかに日本語学校などに7.8万人)がおり、「2020年までに留学生30万人」が目標である。日本の高等教育は、少子化と進学率上昇で全学生数が約300万人で横ばいと予測されているから、その1割を海外からの学生で満たすという計画になる。これまでは、日本語教育を受けた留学生が日本語で行われるクラスに参加する、ということが想定されていたが、留学生の急増(つまり日本語能力などの多様化)に対応すべく、教員が英語で講義を行う、ということが望まれるようになってきた。同時に、漸減していた日本人の海外留学数を7年間で倍(2020年までに大学生12万・高校生6万)にする政策も進められている。

留学生の出身国は多様である。学生数も増加率も、中国やベトナムなどのアジア諸国が目立つが、EUが交換留学制度を域外に広げることに熱心なこともあり、半年から一年ほど滞在する学生が、英独仏伊だけでなく、ポーランド、フィンランド、ジョージア…と欧州全土からやってくる。興味深いことに、その中に、日本語は上手くないが日本に関心を持ち、(いい意味で)気軽に日本へやって来る学生が数多くいる。日本語はできるが英語がダメ、日本語は苦手な英語はOKという学生が教室に混在するため、私もなかなか苦勞するが、どこでも行ってみたい何でも見てみたいという意欲は一樣に高い。そのため、(甲陽の諸先輩からご教示をうけながら)宝塚大劇場、甲子園歴史館、竹中大工道具館、イタリア文化会館、白鹿記念酒造博物館などを利用して関西と世界のつながりを実感してもらうようにしている。

大学の流動化は少子化による教育部門の縮小がもたらしたものである。政府は、2000年以降に国立大学の統廃合を進め、(増え続ける私立大学を圧迫しないように)学部生定員を減らしている(大学院生は増加)。また、政

府支出の縮小で約4割の国立大学が定年退職者の補充を凍結しており、かわりに非正規職員や任期付教員が増えた(私も豪州留学の後、現職まで複数の有期雇用を経験した)。その結果として正規教職員の高齢化が進んでいるが、運営交付金が減るなかで、授業料収入とは別の収入源を見出さない限り根本的な解決には至らないであろう。

公的支援の縮小や少子化への対応として、教育機関が留学生を増やす、人件費を減らすというのは世界的な傾向である。さらに、グローバルな現象として、同窓会の整備・利用が活発に行われている。海外の大学や日本の私大からの熱心な働きかけを体感している方もおられるだろう。一方、国立大学は、これまで同窓生組織の多くが学部・学科、あるいは学年や地域ごとの縦割りであった。しかし、近年になって卒業生に目を向けるようになった。2000年代に全学同窓会を設置した国立大学は、大規模総合大学を中心に33にのぼる。今やほとんどの国立大学が同窓会の運営に関与しており、母国に戻って活躍する卒業生を巻き込んで海外同窓会(支部)をつくる動きも目立つ。

寄付金や(企業など)社会との仲介、学生への学習・就職支援など、大学が卒業生や同窓会に期待するものは大きい。とはいっても、大学と卒業生の間に横たわってきた長年の没交渉を、ホームカミングデーの開催ぐらいで乗り越えるのは容易ではない。後援を求める一方で、(特に現役世代)卒業生に何を提供できるかを考えあぐねているというのが大学の実情で、それゆえに、受験生だけでなく、卒業生のニーズを知りたいというのが本音である。

大学の価値を高めるうえで、同窓会を軸とした卒業生への働きかけが重要だと考えられるようになってきたが、中学や高校においても卒業生との関係が目立つようになるだろう。広範囲な地域から学生を集める大学に比べ、中学・高校には、卒業生が出身地域を共有しているという特徴がある。中学・高校の同窓会は、大学同窓会より所在地に密着しながら、卒業生を通じて世界とつながっている。そういった性格ゆえに、学校の発展のみならず、地域の振興にも寄与するのではないかと私は考えている。阪神間を中心に生徒を集める甲陽学院も例外ではないだろう。現代社会において必要な、ローカルとグローバルをつなぐ場として、甲陽学院同窓会は、ますます重要になっている。

辛島理人(からしまさと)

一橋大学経済学部卒業、オーストラリア国立大学大学院修了(PhD)。

2016年より神戸大学准教授(国際文化学部・国際人間科学部)。

EUエラスムス計画による招聘講師(2017年・ポーランド)。

会員だより

35回 B-29 八十路の集い

昨8月26日甲陽創立百周年同窓会にシンクロして、昭和29年3月、6年間持ち上りのB組卒業生のクラス会を梅田ニュートーキョーにて開催、馳せ参じた80才過ぎの元気な面々は☆飯田昌弘・泉盛男・井上亮一・植野忠海・江口建之・大菅明夫・角田修平・国領薫・柴田隆・鈴木靖雄・田島淳・中野正道・中村文一・西岡正義・松本行弘・三木正之・安富勇・山崎一夫の18名。

当日体調不良や所用の為残念ながら☆阿部喜夫・荒木安正・内田眞朗・小原哲也・大坪孟・蔭山正樹・高橋堯男・藤田一郎・間世田是方・矢田健・山本忠雄・吉田恭平・若林忠雄・多木敏彦の14名。

大菅・柴田・鈴木等と幹事4名がそれなりの精力を尽くしても消息がキャッチ出来なかったのが☆青田寺史・坪井弘光の両君。

そしてご担当頂いた吉田謙一・真川伊佐夫・村上千秋3先生の後を追って早世した17名は☆上田一美・上村浩郎・神戸睦夫・北川淳朗・小寺慶彦・塩谷洋一・下村勉・砂村賢・辰馬恒夫・辰馬秀夫・津吉薫・中村貞三・納谷浩一郎・野原秀乃佑・浜尾仁・藤井正文・丸橋明春。



3時間余の乾杯・献杯・再会誓杯を重ねての充実した晩夏の一夕でした。

(35回 泉盛男)

38回 2017年度同期会

われわれ38回生は同期会を、毎年11月の第2木曜日にJR尼崎駅前のホテルホップインアミニングで開催することにしています。今年もその日がやって来て、11月9日(木)午後1時から29名の同期生が集まり楽しい一刻を持ちました。

友人との交歓を、江戸時代の後期、福井藩主松平春嶽に仕えた歌人 橋 曙覧は「独楽吟」で 楽しみは 心にかよえる 友達と 笑い語りて 腹をよる時 と歌っています。この歌の様にわれわれも愉快的な2時間半を共有し、笑い、語り、飲み交わし、ちょうど60年前に卒業した甲陽時代のことを思い出し、腹をより、気分も若く、ますます元気になりました。

東京圏、東海圏、さらに遠くは新居浜からと、近畿圏以外からも6名の好漢が駆けつけてくれて、1年ぶりの充実した愉快的な同期会となりました。参加者一人一人が近況報告として3分間スピーチを行いました。中学高校の懐かしい写真や塗り絵、洋画、日本画が会場に展示されました。毎日10首の川柳を作ることを日課としてい

るとい人からは、最近の時事川柳30首のプリント配布もいただきました。トリに中学時代の恩師、花輪先生から習ったという「すみれ摘み」という題名の歌を見事な声量で歌う人も出て、元気をもらいました。

橋 曙覧風にその日の様子を詠みますと

楽しみは 一年振りの 同期会
昔に返って 語り合う時
楽しみは 傘寿の今まで
命あり 幸せなりと 感謝する時
楽しみは この同期会
来年も 必ず来ると 誓い合う時

でありました。

次回も11月の第2木曜日、2018年11月8日(木)午後1時から同じホテル(2018年6月6日よりホテルヴィスキオ尼崎)で開催いたします。カレンダーに予定を書き込んでおいてください。みんなで楽しい時間を持ちましょう。

(38回 江寄健一郎)



44回 「藤吉会」

「藤吉会」は昭和32年入学A組「藤野吉平先生」のクラス会です。

年2回していたクラス会も藤野先生が亡くなられたのと、クラスメートが高齢になったのとで年1回になり、最近は毎年はやれなくなりました。そして昨年11月9日に入学60年を記念して西宮北口で久しぶりに行いました。

遠くは札幌から中川君がはせ参じてくれ、藤沢君と奥山君も久しぶりに参加してくれて総勢15名でした。残念ながら昨年は鳥居君が亡くなられましたが、鳥居君といえば高校野球県大会で強豪の報徳を相手に彼のヒットでサヨナラ勝ちをしたのが思い出されます。

さて当日は有志で中学校に行き、校長先生のご案内で新しい講堂を見学しました。講堂だけでなくすべての建物が建て代わりましたがいくつか当時の面影が残されています。講堂の長いすは昔のままの堅い木の椅子だし、校舎は2階建てになったとはいえ中庭もあります。正面玄関の場所は変わりましたが昔の正面玄関が、今はその先は学生食堂ですが、保存されていました。当時私はよく図書館から講堂へ行く渡り廊下から甲山を飽きずに眺

めていましたがいまは見ることができません。我々のときに新調された机が今は使われていませんがいくつか残っていました。

グラウンドで小学生が遊んでいたので先生にお尋ねすると、近くの香栢園小学校の校庭が工事で使えないので子どもたちに開放している、とのことでした。地域との絆を大切にしていることがうかがえ本当に嬉しいことです。

クラス会ですがみな昔に戻って元気ににぎやかに飲み食いできました。一部はそのあと、カラオケに行ってお楽しみしました。これからできるだけ開催しますのでさらに多くの方が元気に参加してくれることを望みます。そうすれば藤野先生もきっと喜ばれることでしょう。

(44回 林正朗)



48回

創立100周年記念と併せて

48回生の卒業50年学年同窓会を開催!!

去る8月26日(土)、全体同窓会のホームカミング学年として43名が参加し、今田高俊さんが「リベラルアーツの再興」と題して講演を行い、彼と私が「高校の思い出を語る」のパネリストに参加、また浜中英二さんの音頭で学院歌・応援歌を歌い、柴田直さんの発声でエールの交換と盛り沢山のプログラムを楽しみました。特にスペシャルプログラムの阪神タイガースチアリーダーによるパフォーマンスは男性ばかりの会場に一際華を添えてくれやんやの人気でした。

引き続き58名の参加で学年同窓会を開催。大塚昭さんの呼びかけで亡くなった18名の方々に黙祷を捧げた後、例によって緒方正雄さんの音頭で乾杯し、続いて一人1分、遠方から又は久方ぶりの参加者は3分の原則で近況報告。ゴルフを楽しむ者、ジムに通う者、オペラ鑑賞に打ち込む者、新しい楽器に挑戦する者、遺跡を巡る者、調停委員・民生委員を務める者、絵や俳句や陶器の創作を行う者、英会話に取り組む者、資格試験の受験生、医者や弁護士として現役活動が続ける者と皆夫々が夫々の興味の赴くまま様々の活動を楽しんでいることが分かり、「えーっ！彼がオペラ？」「もう遺言を準備したの？」と驚くと共に参考にしようと後で確認に行く者も。あっという間の2時間半で最後に全員で記念撮影したの再会を約して散会。

今回は卒業50年記念ということで遠方からの参加者も多く、極めて久しぶりの再会も実現し今後が楽しい学年同窓会でした。

最後にこのような有意義で楽しい同窓会ができたのも西村同窓会長はじめ役員・スタッフの皆様及び今西校長先生はじめ現役・OBの先生方のご努力、ご協力の賜物と心より感謝を申し上げ筆を措きます。

同期会出席者(穂山正幸、天田良紀、有本秀樹、伊賀誠、池内英治、池田収一、一色誠一、今田高俊、植田千裕、臼井利文、梅本実、種田明、大谷純生、大塚昭、緒方正雄、落合英二、小原秀夫、片野一幸、上農哲朗、河内清、川端隆司、儀賀豊達、木村通夫、楠田英史、楠雅博、國本哲三、熊崎哲男、木幡達、小林謙一、小森克紀、櫻井健司、澤田正、柴田健二郎、柴田直、下田廣一郎、竹山隆雄、樽見広志、丹家聖仁、中真砂士、中山学、夏住要一郎、濱中英二、松尾豊広、松本文朗、松本悟、満田雄、宗正敏、米良重徳、森田英一、森本敏秀、保田誠、安間源司、山崎要、山元真士、吉田雄二、吉田好正、米北洋一)

(48回 池田収一)



54回vs55回ゴルフ「交歓」戦

「甲陽だより」二度目の掲載となり大変恐縮ですが、10年前から続いている、54回と55回の「ゴルフ対抗戦」の御報告です。この企画は、甲陽卒業生の異業種交流・勉強会「大阪まちづくりの集い」のメンバーである54回・橋本宏さんと、同じく55回・児玉潔が発起人となって始まったもので、年一回、トップシーズンの11月に開催しています。一応「対抗戦」なので、各学年のグロススコア平均で勝敗を決めており、当初は金丸君・清見君などの有力メンバーを有する55回が優勢でしたが、彼等の不参加に歩調を合わせるように、また竹内(大林)・肥後(鴻池)・橋本(鹿島JV)の安定度などから、ここ数年連続で54回の「圧勝」となっています。ただそれよりも、皆さん還暦も過ぎ、また一学年違いの気安さもあり、和気藹々とした雰囲気で行うラウンドを楽しむという「交歓戦」になってきています。2018年は11月4日(日曜日)を予定していますので、興味のある方は、幹事(54回・吉井友実、55回・児玉潔)まで御一報下さい。

(写真提供：54回 吉井友実、本文：55回 児玉潔)



57回 還暦記念同窓会

私たち57回生は高校卒業後ほぼ5年に1回学年同窓会を開いてきました。その定例同窓会を一昨年は初めて東京で催したところ、参加できなかったメンバーから「来年は還暦やからもういっぺん関西でやろうや」との声が強くなり、2017年10月8日、神戸は神仙閣にて二年連続となる学年同窓会を開催しました。連続にもかかわらず昨年を上回る94名が参加、遠く鹿児島より濱野君、札幌より中島一朗君の姿も。恒例の30秒スピーチ（30秒ルール守ってね（笑））や今西新校長の挨拶などで盛り上がりしました。吉岡君、成田君、司会お疲れ様でした。幹事の国賀君、箱田君、どうもありがとう。写真の廣瀬君にも感謝。ライブハウスSTUDIO KIKIを借り切った二次会にもほぼ全員が参加、これまた国賀君のお世話でした。還暦を迎え仕事への情熱も薄れ、同窓会だけが楽しみという（人もいる）ので、これからは二年に一回やります！

(57回 今西昭)

62回 山下先生をお招きして東京同期会

平成29年10月14日、3月に退職された山下正昭前校長を東京にお招きし、主に東京在住の62回卒有志による集いが開かれました。

まず不肖私が館長を務める東京国立近代美術館に先生と20名を超える同級生が集まり、企画展「日本の家1945年以降の建築と暮らし」などをお楽しみいただきました。

続いて会場をKKRホテル東京に移し、記念撮影ののち東京での同期会を開きました。出席者は30名を超えました。

中には卒業以来初めて参加する者も数人いましたが、山下先生は即座に名前を呼ばれるので、みなびっくり。先生のご挨拶も、退職の経緯から私たちを担任された頃の思い出話まで多岐にわたり、独特の表現の中にプライドと美学を感じさせるものでした。

久しぶりの参加者による近況報告は、途中から現役時代の所属クラブごとの発表に変わる一方、会場のあちこちで再会を喜ぶ声が上がリ、最後は学院歌の斉唱でお開きとなりました。一部の参加者は、2次会そして3次会で旧交をさらに温めました。

(62回 神代浩)

**62回 同窓会ご報告**

去る1月2日に、今回は場所を変え神戸オリエンタルホテルにおいて32名の参加を得て62回卒の同窓会を行いました。当日は山下校長にも押してご参加いただき、Python言語と出会い、それを用いた数学を趣味とされていること（ご興味がある方は、Project Eulerをご参照ください）など、近況についてお話し頂きました。また、遠くはドイツ、シンガポールに居住している方や、久しぶりに参加される方などをはじめ、それぞれの現状を報告し合い、終始楽しい会になりました。引き続いての二次会にも22名の方が参加し、最後は健康の維持と再会を約束して散会しました。

なお、次回同期同窓会は、3年後の2021年に行う予定です。その他にも東京、大阪を中心に下記メーリングリスト等の登録者を対象としたミニ同窓会を行っています。こうした案内をはじめ今後の連絡のために未だメールアドレスを登録していない方は、koyo@watase.infoまでご連絡をお願いします。また、ホームページ(<http://www.watase.info/koyo62/>)やFacebookでも情報交換を行っていますので、そちらもご活用ください。

(62回 渡瀬誠)

**72回 同窓会**

平成29年11月18日（土）に72回生有志で西宮にて同窓会を開きました。

40代半ばで仕事に家庭に忙しい年代ですが、15名のメンバーが集まりました。当日は学生時代に戻ったような懐かしい気持ちになりました。また在学時にはほとんど話さなかった同級生とも、このような場で再会すると旧知の友のように会話が弾み、大変楽しい時間を過ごす



ごとができました。

これまで SNS などにつながった同級生には連絡できているのですが、まだまだ全員には連絡できていません。これからは、可能な限り多くの同級生に連絡を取り、少しでも同期の輪を拡げて親睦を深めていきたいと思います。

(72 回 川野光伸)

75回

平成 29 年 12 月 30 日午後 6 時から、75 回生の同窓会が盛大に開催されました。「2 年後の同窓会総会では 75 回がホームカミングデーなので沢山集まるようにしよう。その呼びかけのために、一度、ここで集まっておこう。」という、わかるのだから、わからないのだから、良くわからない理由で秋ごろになってから急きょ呼びかけを始めたにもかかわらず、50 名を超える旧友たちが集まることができました。

高校卒業以来 20 年以上の久しい仲間との再会もあり、「それぞれ、様々な人生経験を積みつつ、さあここからまたひと頑張り」といった時期で、お互いの健勝を確かめつつ英気を養いました。

二次会も 30 名超が参加し、定員をはるかにオーバーするカラオケボックスの一部屋に少し？横に成長した体を詰め込み、誰もマイクを握らず、べちゃくちゃとお喋りをつづけるという、相変わらずの甲陽生ぶりを発揮し、最後は応援団長の指揮のもと学院歌を斉唱して締めました。(もちろん、三次会もありました。)

(75 回 中祖康智)



第20回 同窓会全体コンペ(春) 第21回 同コンペ(秋)ご報告と 第22回 同コンペ平成30年(春)のご案内

第 20 回 (平成 29 年 5 月 14 日開催)

<出席者 (敬称略)>

35 回：坪井弘光 36 回：西村善明 43 回：南 聡・吉藤賢了 45 回：西村貞一 47 回：岡田 孝 51 回：本井敏雄 53 回：加登 豊 54 回：吉井友実 55 回：大林良和・西村盾彦 56 回：足立 寛・大山 司 57 回：

薄木成一郎・芝原 功・巽 健・山本孝文 60 回：森川光一郎・綿谷 卓 75 回：谷 晋一郎

以上 20 名

<成績>

優勝：大山 司

準優勝：山本隆文

3 位：西村善明

B B：岡田 孝

第 21 回 (平成 29 年 10 月 15 日開催)

<出席者 (敬称略)>

石川義明 (元校長) 35 回：坪井弘光 43 回：南 聡 45 回：浅井信雄・西村貞一 54 回：竹内 孝・吉井友実 55 回：西村盾彦 56 回：石渡秀二・信谷宗平 57 回：薄木成一郎 58 回：丸川正明 60 回：森川光一郎 63 回：山城荒平 67 回：伊東桂一 75 回：谷 晋一郎

以上 16 名

<成績>

優勝：伊東桂一

準優勝：浅井信雄

3 位：西村盾彦

B B：森川光一郎

平成 30 年 (春) 開催ご案内

日 時：平成 30 年 3 月 25 日 (日)

午前 8 時 38 分スタート

コース：武庫の台ゴルフコース TEL 078-985-2362

6 組で予約しております。大勢の方のご参加を期待しております。

<幹事> 吉井友実 (54 回) Tel 090-2385-1976

綿谷 卓 (60 回) Tel 090-4900-4099



ていさん会

昨年2017年9月23日、奥様の中村満佐美様をお迎えして、「ていさんを語る会」が甲子園ノボテルホテルで開かれた。“ていさん”とは、一昨年暮れに80歳で亡くなられた中村貞三氏への親しみを込めた愛称である。サッカー部OB会南会長の呼び掛けで、中村貞三氏を偲ぶ集いに、中村氏と同期の35回三木正之 大先輩をはじめ、ていさんの指導の下1976年近畿大会出場の59回生まで、東京からの参加者も含め23名が集まった。今年で66回を数える甲陽・灘サッカー定期戦をていさんと共に立ち上げられた灘校サッカー部OB 今永俊明氏から追悼文が寄せられ、揚野氏が読み上げ黙祷を捧げた。

サッカーへの人並外れた情熱で、厳しくも愛情溢れる指導をされたていさんには出席者全員が夫々深い思い出がある。曲がっていないバナナシュート自慢、自信の裏付けは血の小便が出る位？の練習、PKを通じて教えて頂いたリーダーシップのあり方、試合中のイテマエ連呼、卒業後もイベントや季節折々に頂戴する茶目っ気も混じえた写真付葉書等々。サッカーマンとして、サッカー部OB会の求心力として、また教育者として、人生の先輩として、ていさんの得も言えぬ愛嬌も相俟って、お人柄が滲み出る懐かしくも印象深い思い出を一人一人が語った。「さもありなん」とのご感想と共に奥様が皆様への深い感謝の言を以てご挨拶を締めくくられた。

創設に貢献された東西交流戦の第1回に、当時76歳でご病気にも拘らず上京され、半パン姿で元気にボールを追いかけられたていさんの後ろ姿が今も目に焼き付いています。

2021年は甲陽サッカー部創立百周年に当たります。ていさんのサッカーへの深い愛情を受け継ぎ胸に燃やし続ける事を天国のていさんに誓って偲ぶ会の報告と致します。

(52回 武田信一郎)



甲陽学院サッカー部 森本保先生退職謝恩会



2017年2月11日(土)ノボテル甲子園において、サッカー部OB約60名が集まり「甲陽学院サッカー部森本先生退職謝恩会」が開催されました。

森本保先生は1979年4月に甲陽学院の教壇に立ち始めてから38年間に亘って数学を指導してこられました。また、教鞭をとっておられたのとはほぼ同じ期間サッカー部顧問として甲陽学院サッカー部の運営・指導にもご尽力下さいました。今年3月で定年退職されるということで、サッカー部でお世話になったOBで何か感謝の気持ちを伝える機会を持てないかとの思いで謝恩会を企画し、開催の運びとなりました。

謝恩会は、昨年末に亡くなられた前OB会長中村貞三氏(35回)に対し黙祷を捧げた後、世話人代表の加藤隆哉氏(65回)の開催ご挨拶、ご来賓として参加いただいたOB会長南聰氏(43回)のご挨拶、副会長揚野寛氏(45回)の乾杯でスタートしました。歓談の後、各学年毎にステージに上がり、森本先生との思い出やエピソードを感謝の気持ちとともに披露し、終始和やかな雰囲気の中で会は進行しました。受付の際に甲陽・灘のサッカー定期戦や甲陽・関学の交歓競技会(甲関戦)の戦績の資料が配布され、あちらこちらで現役当時のプレーや印象に残った試合等の話に花が咲いていました。残念ながら当日参加できなかったOBからもたくさんのメッセージが寄せられており、中には海外からのメッセージの紹介もありました。森本先生に対するOB諸氏の思いの強さを感じる一面でした。記念品贈呈では、純白のサッカーボールに参加者全員が名前を書き込んだ記帳ならぬ「記ボール」、実際に使用可能な全面ゴールド地に赤マークのサッカーシューズ、2002年ワールドカップ記念の純金メッキのホイッスルとサッカーづくしのプレゼントが手渡されました。パーティー終盤では、サプライズゲストとして森本先生の奥様にもご参加いただき、花束贈呈が行われ大いに盛り上がりました。最後に森本先生から甲陽学院での思い出についてのお話があり、先

生の教育に対する真摯で誠実な姿勢が強く伝わってきました。参加者の中には関東はじめ全国各地から駆けつけた人も多く、卒業以来の再会で学年をまたいだ交流があらこちらに見られ同窓会のような雰囲気でした。普段なかなか会う機会の無いメンバーも森本先生の退職謝恩会ということで一堂に会することができ、あっという間の3時間で、参加者皆が大変楽しく充実した時間を過ごせました。これもまた、森本先生のお人柄のなせる技と改めて感謝の気持ちを強くしました。謝恩会は大盛況の中、記念撮影・先生の胴上げで幕を閉じました。

ご退職後は数学の道とは少し距離を置いて、趣味のクラシック音楽や登山、旅行等を楽しまれるご予約とのことです。森本先生は甲陽学院を退職されますが、サッカー部OBとしてのおつきあいは今後も続いています。森本先生、長い間大変お疲れさまでした。そして、これからもよろしくお願ひいたします。

(68回 青野益久・柴原基)

第2回 大阪市立大学医学部甲陽会

平成 29 年 12 月 2 日に大阪市立大学甲陽会を大阪梅田の鳥よしで市大消化器内科の主催で開催いたしました。場所柄、大阪の私立公立のように同窓会をするにも人数が集まらないことが予測される歯がゆい状況が続いておりましたが、近年、大阪市立大学医学部を志望し入学される甲陽生が増えたため、昨年から大阪市立大学内部で勤務している者が中心に開催することとなり、本会で第2回の開催となります。本年も残念ながら名簿が存在しないため連絡周知が不十分のなか、ありがたいことに63回生から95回生まで幅広い学年の医師19人医学生8人の大人数に参加いただきました。今回は目玉企画としてビンゴゲームも開催いたしまして、学院歌が流れるなか、豪華賞品として甲陽ゆかりの物品や白鹿の日本酒などを用意し大好評のうちに終了いたしました。今後も年1度の開催を目指して同窓同士の交流を図っていきたいと思っております。本会に興味がある方、次回参加してもよいと考えていただける方は、80回生 灘谷（なだたに：dada@med.osaka-cu.ac.jp）にご一報いただけますと幸いです。

(80回 灘谷祐二)



第7回関西甲陽ネット交流会

平成 29 年 10 月 7 日（土）大阪の株式会社サクラクレパス本社内、サクラアートミュージアムにて第7回関西甲陽ネット交流会が開催されました。

多忙の中、今回も東京からこの日のために駆けつけてくださった参加者を含め、最年長54回最年少94回の計27名の甲陽OBが集結しました。

株式会社サクラクレパスは、甲陽学院同窓会長の西村貞一さん（45回）が代表取締役会長をつとめられています。今回の交流会は、西村会長のご講演に加え、サクラアートミュージアム主任学芸員の清水靖子さんの解説がありました。

冒頭のギャラリートークでは、清水さんよりサクラアートミュージアムに現在展示してある作品を紹介いただきました。クレパス画の進化の歴史が一目でわかる展示となっており、参加者一同早くもクレパスの世界に引き込まれました。

西村会長の講演では、サクラアートミュージアムができるまでのいきさつ、サクラクレパス本社ビルを建設にあたったこだわりなど、普段聞くことができない貴重なお話をいただきました。

続いて、学芸員の清水さんからのお話では、そもそもの「クレパス」と「クレヨン」の違い、大正8年に日本初のクレヨンが誕生してから大正10年にクレパスが誕生するまでのお話、そして現代までの発展の経緯について伺うことができました。数多くのクレパス画をご紹介いただく中では、クレパス画素人の参加者も世界に入り込めるよう、はだかの大将でおなじみの山下清さんの作品などもご紹介いただきました。

参加者一同、何げなく幼少期から慣れ親しんでいたクレパスについて改めて学ぶことができとても充実したひとときとなりました。また、講演会後の懇親会は、今回はあえて敷居の低い居酒屋で年代を超えた交流を深めることができました。

関西甲陽ネットでは、甲陽OBの繋がりを強固にすることを目的に、これからも刺激的な企画を打ち出していく予定です。ホームページ（<http://kansai-koyo.net/>）より会員登録をお願いいたします。

(87回 大川恭弘)



告 知 板

☆ 新卒者の終身会費制度 ☆

今年高校を卒業した99回生の皆さんは、卒業時点で終身会費を納めることを選択できます。詳細は、追って振込用紙同封の文書にてご案内いたします。

また、これに伴い、卒業後7年以内の方（卒業時に7年分の年会費を前納）でも、ご希望により終身会費制に移行していただけるようになっています。その際の金額はP.2の表をご覧ください。

☆ 会報「甲陽だより」の原稿募集 ☆

* 次号・第98号は、平成30年7月末頃に発行を予定しています。

* 「会員だより（同期会・クラス会）」「運動部・文化部のOB会だより」などのご投稿をお待ちしています。

* 原稿の締切日は、平成30年5月31日です。

創立記念音楽会 次年度も中学校講堂にて

来る4月29日（祝・日）に甲陽学院中学校の講堂において、創立記念音楽会が行われます。

中西 幸夫氏（工経）	近藤 知司氏（工専2）	井上登志司氏（工専2）	中西 竹二氏（高商3）	田中 芳雄氏（高商1）	荻田真一郎氏（54回）	菅野 鉦二氏（52回）	小 鯖 寛氏（52回）	北 澤 治氏（49回）	鳥 居 秀行氏（44回）	五 藤 宏氏（44回）	永 滝 信一氏（43回）	木 村 徳弘氏（42回）	松 村 雄次氏（41回）	田 畠 治氏（41回）	増 本 征三氏（40回）	下 村 周氏（40回）	駒 川 亘氏（38回）	廣 田 靖保氏（38回）	喜 田 和郎氏（33回）	池 上 吉藏氏（33回）	日 原 正好氏（32回）	詠 田 善治氏（31回）	鈴木 登氏（31回）	川 崎 昭吾氏（31回）	阪 口 昭二氏（24回）	松 本 哲氏（23回）	野 里 僚一氏（23回）	朝 田 修平氏（23回）	田 中 元治氏（22回）	樋 口 達彦氏（21回）	名 田 甲子男氏（20回）	響 田 武氏（20回）
13年6月	17年6月3日	16年9月16日	16年6月29日	17年12月2日	17年8月13日	17年11月28日	17年6月30日	17年6月8日	17年2月12日	16年9月23日	18年1月20日	17年7月25日	17年3月23日	17年8月22日	17年5月9日	16年12月9日	17年5月14日	17年5月8日	17年8月14日	17年7月29日	17年8月4日	17年11月28日	17年3月13日	17年11月13日	17年7月9日	17年7月3日	17年10月16日	17年11月2日	17年7月24日	17年7月9日	17年4月19日	

事務局では左記会員の逝去の報に接しました。謹んで哀悼の意を表します。

訃 報

（平成30年1月31日現在）

訃報 山田 宏 先生

1965年から98年まで数学科教諭ならびに教頭として勤められた山田宏先生が、2017年12月14日逝去されました。享年82歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。

山田先生の追悼文を次号甲陽だより（第98号）に掲載する予定です

予告

今年の会員総会は8月25日(土)です！

平成30年8月25日(土)13時～16時30分 於:ホテルヒューイット甲子園(旧ノボテル甲子園)

☆講師は、関西経済同友会代表幹事で関西の経済界で活躍されているコクヨ株式会社社長黒田章裕さん(49回)で、講演内容は『関西経済の今後(仮題)』です。また、ストロー音楽で有名な大阪音楽大学講師の神谷徹さん(49回)の演奏も予定しています。

☆今年も総会司会は、テレビで活躍中の高橋知裕さんです。

☆今回の主役となるホームカミング学年は、49回生(卒業50年)、64回生(卒業35年)、74回生(卒業25年)です。ホームカミング学年の方はふるってご参加ください！

☆現在会員総会運営委員会にて鋭意準備企画。詳細は次号「甲陽だより」(7月下旬発行予定)にて発表します。